



## 陸自の演習場

理事長 森 勉

陸自は部隊の機動展開・射撃・築城訓練等の場として全国に6個の大演習場（矢白別・北海道・王城寺・北富士・東富士・日出生台）、14個の中演習場、50個の小演習場等を保持しており、総面積は約800km<sup>2</sup>で東京ドーム約1万7000個に相当する。一見広大なもののように思われるが、多くの演習場は日本陸軍以来のものであり、最新の装備を保持している陸自にとって質・量共に十分なものではない。このため、ミサイル・火炮等の最大射程の射撃訓練を米国で実施すると共にシミュレーションや指揮所演習等で実動訓練を補完している。作戦基本部隊たる師団が装備するミサイルや火炮の射程は数十キロメートルであり、国内最大の矢白別演習場においても最大射程の射撃訓練の実施は困難である。又、車両化している陸自師団の機動速度は、徒歩を主体とした日本陸軍とは比較出来ない程大きく、師団の機動展開訓練を実施できる演習場は国内には皆無である。師団以上の実動訓練は私が小隊長として参加した昭和40年代後半王城寺演習場等で統裁された6師団と9師団の対抗演習を最後に実施されていない。

過酷な戦場での隊員に対する負荷は想像を絶するものであり、訓練で実施したこと以上の行動を実戦で期待することは出来ない。戦場での失敗は隊員にとっては死を、部隊にとっては敗北を意味する。このため実動訓練を最も重視し、実戦より遥かに厳しい状況で部隊・隊員を繰り返し鍛錬する。余談になるが、陸自の教育訓練はその特性上人間教育というよりは徹底した職能教育であり、陸自の組織管理の根幹である特技制度に基づく各種学校等における基本教育（OFF-JT）と部隊における戦いかつ教える練成訓練（OJT）との併用である。その様な中、隊員の人格や個性を尊重し教える「教育」と教官と被教育者が共に育つ「共育」という良き伝統を保持している。

百年兵を養うは本日一日のため、治に居て乱を忘れず、備えあれば憂いなしと言われるが、平時に部隊の精強性を維持することは容易なことではない。如何に兵力が多かろうと、装備が優れていようと、部隊の訓練練度が低ければ烏合の衆でしかあり得ない。陸自は先人達の努力の結果、規模はさほどでもないが近代的な装備を保持し、規律厳正・団結強固・士気旺盛で訓練練度も極めて高い精強性を維持している。これ偏に陸自の隊員が戦場で血を流さないため、実動訓練で血の滲むような汗を流している全国各地の道場たる演習場の賜である。